

ヒロイン

君の毎日に 僕は似合わないかな
白い空から 雪が落ちた
別にいいさと 吐き出したため息が
少し残って 寂しそうに消えた
君の街にも 降っているかな
ああ今隣で

雪が綺麗と笑うのは君がいい
でも寒いねって嬉しそうなのも
転びそうになって掴んだ手の
その先で
ありがとうって楽しそうなのも
それも君がいい

気付けばあたりは
ほとんどが白く染まって
散らかった事忘れてしまいそう
意外と積もったねと
メールを送ろうとして
打ちかけのまま ポケットに入れた
好まれるような 強く優しい僕に
変われないかな

雪が綺麗と笑うのは君がいい
出しかけた答え胸が痛くて

渡^{わた}し方^{かた}もどこに捨^すてればいいのかも
分^わからずに
君^{きみ}から見^みえてる景^け色^{しき}に
ただ怯^{おび}えているんだ

思えばどんな映画を観たって
どんな小説や音楽だって
そのヒロインに重ねてしまうのは
君だよ
行ってみたい遠い場所で見たい
夜空も
隣に描くのはいつでも
見慣れたはずの街がこんなにも
馬鹿だなあ僕は

君の街に白い雪が降った時
君は誰に会いたくなるんだろう
雪が綺麗だねって
誰に言いたくなるんだろう
僕はやっぱり僕は

雪が綺麗と笑うのは君がいい
でも寒いねって嬉しそうなのも
転びそうになって掴んだ手の
その先で
ありがとうって楽しそうなのも
全部君がいい